

Japanese Association of Trombonists JAT NEWS

第 62 号

日本トロンボーン協会会報 2004.6 発行

事務局：〒112-0013 東京都文京区音羽1-20-14 MBS音羽ビル5F プロアルテムジケ内 tel. 03-3943-6677 fax. 03-3943-6659
郵便振込：日本トロンボーン協会事務局 東京 9-175867

第6回トロンボーンアカデミー＆フェスティバルを終えて

去る3月20日・21日の二日間の日程で「第6回トロンボーンアカデミー＆フェスティバル」が東京都北区の滝野川会館にて開催されました。

これは日本トロンボーン協会主催の恒例イベントで、「トロンボーンをより多くの方に知っていただこう！」と協会常任理事が一致団結して開催しているものです。

毎年大勢の方々が参加してレッスンを受講されたり、コンサートや講演会などに耳を傾けていらっしゃいます。

今年はこのイベントの実行委員長に若輩者の私、牧瀬顕利が仰せつかりました。

どこまで出来るのだろう？今までの実行委員長の方々のように成功させられるのだろうか？等など、不安だらけの1年間でした。

ですが、いろいろと問題もあったかもしませんが、無事、滞り無く終了することができました。

ご参加いただいた会員の皆様、如何でしたでしょうか？

じつは今回の1日目「アカデミー」が大盛況で、定員オーバーのためにお断りさせていただいた方

が数名いらっしゃいました。また、個人レッスンも申し込みが非常に多く場所の確保や講師の休憩時間を確保するのが非常に大変でした。

これはトロンボーン愛好家の皆様が日頃から如何に上達したいと願い、真剣に取組まれているかの現れなのではないでしょうか。

2日目の「フェスティバル」では前回から開催しており

ます「アンサンブルコンテスト」が形式を変えてトーナメント方式「T-1バトル」と銘打って行ないました。

当初、参加団体の数や審査方法などいろいろと心配事が多数ございました。

ところが蓋を開けてみると村田厚生理事の司会（K-1レフリー風）と相まって大盛り上がり！でした。

また、講演会も立ち見が出るほどの盛況ぶりで、マウスピースや楽器に対する皆様の関心の高さを垣間見ました。

さてフェスティバル最大の关心事といえば、やはりコンサート！ですよね。

今年は副題として“トロンボーン再発見”を掲げてみました。そこで古今東西を問わず、私の独断と偏見で私自身が聴きたいプレイヤーと皆さんには是非聴いていただきたいプレイヤーの方々に集まっています。

プログラム的には「ポザウネシュトラーセ」の演奏でクラシックをゆっくり堪能していただきと思って



三輪純生会長 谷 啓氏 永瀬幸雄顧問

いたのですが、大どんでん返し！大阪からこのためだけに駆けつけて下さった近藤氏の軽妙なトークと熱い演奏により最初からテンション最高潮！

このまま普段から熱い「ザ・ジョイフルプラス」へバトンタッチ！

そして憧れの溜息が出るような素晴らしいサウンドを奏でる「ブルートロンボーンズ」へとつながって行きまし

た。

やはり一流のプレーヤーの方々は凄いです！私の予想をはるかに超える吸引力でお客様を引きつけて楽しませて下さいました。

コンサートの締め括りは「谷啓 & ブラストラボーン ジャパン」です。

なぜ？この実行委員長で谷さんに出演していただくことが可能になったのか？ じつは私、ブラストラボーンのメンバーなんです（＾＾ゞ

そして、主宰の板倉駿夫氏やメンバーでもあります岸名和巳理事が谷さんの高校の後輩ということで、一昨年ブラストラボーンの演奏会に谷さんが出演して下さいました。

その関係で今回来ていただくことが出来たのであります。

谷さんの音楽に対する思いがひしひしと伝わる楽しいステージでした。

“ガチョ～ん”で始まり、ケーナ等の演奏。

その上、この日のために新曲を持ってきて下さったんです！聴いた方はおわかりでしょうが、なんと谷さんの英語の唄入り！なんですね。でも、言っているのは「スキューバ ダイバー」のみ！リハーサルでは谷さんは唄わなかったので、本番での演奏中に笑いを堪えるので大変でした。

このような楽しい方ですが、谷さんといえばトロンボーン！トロンボーンといえば谷さん！というくらい谷さんはトロンボーンを一般に知らしめた方だと思います。

私自身「トロンボーンってどんな楽器？」と聞かれると「谷啓さんがやっている楽器！」と答えていました。それで大抵“あ～！あれね！”とわかってもらえます。

そんな谷さんのトロンボーンに対する思いや隠れた功績、そしてなにより今回快く出演して下さいましたことに感謝し、協会より「名誉会員」になっていましたこととなりました。

これは同時開催されました「総会」にて当協会顧問の永瀬幸雄氏より提案があり、全会一致にて可決いたしました。

そんな谷さんも入っての「全員合奏」本当に盛り上りました。

総合司会でこのイベントを本当に盛り上げて下さいました村田厚生理事のアレンジで今でも話題の森山直太郎「さくら」は本当に感動でした。

残念ながら、今回も満席にはな



りませんでした。でも、会場の盛り上がりかたやご来場者の笑顔から察するに今回も大成功だったと確信しております。

今回来られなかつた方！次回は是非一緒に楽しみましょう！そして1人でも多くのトロンボーン＆音楽愛好家が増えることを願つて止みません。そしたら戦争なんか起こらないのにね。

これからも協会理事として、日本トロンボーン協会が素晴らしい協会になるよう、また会員の方々が少しでも楽しめるよう努力していこうと思っております。

最後になりましたが、素晴らしい演奏をして下さいました出演者の方々をはじめ、今回のため多大なる協力をいただきました協賛会社様、また私を影から助けて下さいました理事の方々とプロアルテムジケのスタッフの方々、そしてご来場下さいましたすべてのお客様にこの場をお借りしまして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

第6回トロンボーンアカデミー＆フェスティバル
実行委員長 牧瀬 顯利



小野隆洋&永原緑へトロンボーン・ピアノデュオリサイタル レポート

◆リサイタル in 手作りコンサート！

このデュオリサイタルは、去る4月17日、「清新町で音楽をきく会」主催により、清新町コミュニティ会館ホール（東京メトロ東西線西葛西駅、徒歩15分）において開催されました。この演奏会には「私たちの町に生まれた私たちの手で育てる音楽会」の副題が付いており、その回数も今回で第47回(!)とのこと。リサイタルは、地域に根付いた「タウン・コンサートと」いうコンセプトに、ピッタリで楽しいものでしたので、演奏後の懇談会を含めレポートしてみたいと思います。

トロンボーンの小野隆洋さんは東京音大卒後、パリ音楽院（CNR）に留学、昨年帰国された俊英です。現在は日本とヨーロッパを中心に演奏活動やアマチュア指導で活躍中。本レポート筆者の所属する市民オケTbパートでも、小野さんにはオケスタ、アンサンブル、ソロなど様々なレッスンを通じ、留学以前からお付き合いいただいている。また永原緑さんは、東京藝大器楽科首席卒、第66回日本音楽コンクール最高位、国内外のオケとの共演や多くのリサイタルなど、ソリストとして輝かしい経歴を持ち、現在は東京藝大管楽器科伴奏助手としてもご活躍の美しきピアニストであります。

お二人には私共のグループ主催で2000年12月末、20世紀最後(!?)のTbリサイタルをしていただいた繋がりもあります。

◆リサイタルにて

「クラシックが固いというイメージを払拭したい」と普段から語る小野さん。このリサイタルも多彩な選曲プログラムが組まれ、そしてまた、曲目解説も小野さん自らがMCを担当というスタイルで行われました。

ユニークな選曲と快活なMCの効果も相まって、途中から椅子を追加するほどの来場者で溢れた客席の雰囲気は、開演時から終始とても穏やかなものでした。特に曲目解説に止まらず、「金管楽器はどのようにして鳴らすのか」や「トロンボーンという楽器とは」などを語る小野さんに、かぶりつきに座った年配男性（中小企業社長風）が腕組みし、前のめりの体勢で大きくうなずきながら聞きいっている姿はまさに「タウン・コンサート！」といった風情でした。

しかし多くの聴衆に恵まれた演奏会場は、残念ながら響きはテッドになるのが常、今回のホールも、元来テッドなのがいつそうテッドに。正直なところ前半は、彼の持ち味である会場全体を包み込むような響きやヴィブラートが思うように發揮できず、幾分苦戦されているように見受けられました。ところがそれを見て取った某Tb重鎮H氏が休憩の間に入口暗幕を収納、この計らいが見事的申し、後



小野隆洋 & 永原 緑トロンボーン・ピアノデュオリサイタル(2004.4.17、第47回清新町タウンコンサート、東京都江戸川区)

半はヨーロッパの香りを存分に感じられる響きとなりました。

とくに、トロンボーンとピアノが競い合う難曲、プログラムの最後を飾るヒンデミットのソナタは、このリサイタルの白眉であったといえましょう。

そしてアンコールの「アヴェマリア(シューベルト)」が終わったあと、私の斜め前にいたご婦人方が、大変嬉しそうに柔らかい笑顔で拍手を贈っていた光景は、とても印象的でした。

◆演奏会後の懇談にて～小野さん編

リサイタル終了後、懇談の席にて小野さんにフランスで勉強されたことなどについて、ざっくばらんに伺いました。語っていただいた中から、私が興味深く感じたことを幾つかご紹介したいと思います(ただしあくまで筆者の私の聞きかじりとご了承おき下さい)。

・学生気質について：「日本の音楽大学の多くの学生とフランスと一緒に勉強した学生との大きな違いは、音楽に対する情熱ではないでしょうか。音楽を何のためにやるのか、何を表現したいのか、何を伝えたいのか、こうしたことに対する想いが学生各々に明確であったと感じました。」

・音楽で伝えるもの：「私は自分自身が音楽をやっていて良かったと感じる瞬間は、演奏を通じてコミュニケーションできた時だと思います。言い換えれば演奏会での演奏者と聴衆が、単に演奏する・聴いている、という関係ではなく、お互いがその演奏会の時間を幸せな楽しい時間になるように向かって行く関係が構築できた時、ということです。」

・フランスの授業から：「たとえ音符通りトロンボーンを吹いてても、楽譜にあらわされているリズムのキャラクター や音程、フレージングなどが、自分でうまく解析・消化されていないと、音楽としてうまくいきませんよね。私

がフランスで勉強した学校では『フォーメーションミュージック』という授業が何よりも最優先されます。これはソルフェージュを含む音楽の根本的事項を勉強する授業で、楽譜の解析を勉強します。どんなに著名な先生の実技レッスンより優先される授業となっていました。楽器というのは結局、自分の音楽を表現する媒体でしかないことをあらためて深く考えることができました」

・留学を通じ考えたこと：「良いものの価値をきちんと理解し、そこを目指していくことが大切。自分の善し悪しを判断できるのは自分自身、つまりは自分にとって一番の師匠は自分自身なのだと」ということ。そんなことをフランスで学び、考えました」

◆演奏会後の懇談にて～永原さん編

今回もデュオ、ソロに素敵なピアノを聴かせてくださった永原縁さんにも伺いました。「アンサンブルは楽しそうだけれど、ソロが大変だから余裕がないくて…」先日、あるピアノの学生がそう言っていたんです。アンサンブルは楽しいし、ソロでは得られないものが沢山あるので是非多くの学生さんたちに経験してもらいたい」とのこと。しかし「なんで伴奏なんかするの?」というピアニストも少なくないのだとか。

とはいって、我が国でもアンサンブル・ピアニストの重要性は高まってきているのは確かで、なかでも永原さんの活躍はめざましいものです。

テレビで日本音楽コンクール管楽器部門ドキュメントを見れば、何人もの伴奏で彼女の素敵な背中が映り、ラジオ・リサイタルを聴けば「ただ今のピアノ伴奏は、永原縁さんでした」と聞くことも少なくありません。

必ずや、邦人アンサンブル・ピアニストの名手の一人として、今後よりいつそう注目されることでしょう。

ちなみにモーツアルト連続演奏会など活発にソロ活動されているピアニスト三輪郁さん(JAT三輪会長ご令嬢)も、ウィーン・フィルメンバーが来日すれば「日本二ハ郁ガイル」と言わんばかりにデュオでも登場されていますので、ご注目を！

◆「軌跡」へのエールレポートのおわりに

今回の演奏会における筆者のキーワードは「同等」。聴き手と演じ手、ソリストと伴奏者…。「聴き手=演じ手、そういう音楽を通じてのコミュニケーションをこれからも続けていきたいですね」と共に語られた小野さんと永原さん。お二人のリサイタルを通じ、ソリストとピアニストの「デュオ」という音楽作りをあらためて考える機会となりました。ピアノ伴奏は決して一步引いたものではないのだなどと、当然といえば当然ですが…。

さて確実に、そして伸びやかな「軌跡」を描き始めたお二人、それぞれの活動にこれからも注目していきたいと思っています。

(レポーター：八柳智美／あんさんぶる“トトロっち”千代田フィルハーモニー管弦楽団所属)

P.S : 小野隆洋オフィシャルサイトご案内。 <http://www.chise.jp/takahiro/>
※「Diary」がなかなか面白いですよ。

【プログラム】

- (1) ニヴェール：マエストーソ
- (2) ワーゲンザイル：アルトトロンボーン協奏曲
- (3) 成田為三：浜辺の歌
- (4) ヘンデル：ラルゴ(オンブラマイフ)
- (5) テュティユー：コラール・カデンツァとフーガ
- (6) ショパン：バラード第1番 *pf ソロ
- (7) ヒンデミット：トロンボーンとピアノのためのソナタ
アンコール(1)／見岳章「川の流れのように」
アンコール(2)／シューベルト「アヴェマリア」

『小野隆洋と50本のトロンボーン』を終えて

2004年1月10日～11日にかけて山口市の山口情報芸術センター（ピッグウエーブやまぐち）にて『小野隆洋と50本のトロンボーン』＝トロンボーンセミナー イン 山口 2004がシルクルマーリート インターナショナル コンサートの会主催により開催された。受講したのは県内と島根、広島の経験1年未満の初心者から10年以上の経験者・専門家まで中・高・大学・一般（専門家含む）ら合計57名のトロンボーン奏者が受講した。講師には世界を舞台に活躍する小野隆洋氏を招き、奏法の基礎技術からハーモニー・音楽の創り方まで幅広い指導が行われた。これは昨年、秋に小野氏が山口で計4回のリサイタルで公演超満員、延べ1000人の聴衆を魅了した。その際県内の7・8校の高等学校を訪ね、吹奏楽部の金管楽器を指導したが、基礎ができないトロンボーン奏者が多いことを痛感。奏者を一堂に集め、基礎から学べる場を提供したいと同会実行委員会が中心となり市民の企画として企画された。

セミナー初日は奏法の基礎技術からメンテナンスまで幅広く指導、午後からは参加者全員によるトロンボーン合奏、そして2日目も同じく午前中は基礎技術から日頃の練習方法や演奏技術向上に向けて、またコンサートでの演奏のクオリティーの安定性などの面から丁寧に指導が行われた。夕方には会場に入りきれないほどの観客を迎え、小野氏のタクトの下、受講生全員によるアンサンブルの演奏は会場にいた人全てが一体となり感動的であった。さらに、小野氏自らがトロンボーンとピアノによるソロの演奏を行い大盛況に幕を閉じた。

またいつの日かあの素晴らしいトロンボーンサウンドが鳴り響くが来るることを、そして小野氏の今後益々の活躍を期待するとともに、日本のトロンボーン界の発展と明るい将来を願って止まない。

シルクルマーリート インターナショナル コンサートの会
『小野隆洋と50本のトロンボーン』実行委員長
棟久 佳代子

「ドイツのトロンボーンと留学環境」

松谷 聰美

今回、ここ私が勉強しているドイツから日本へ、私なりにドイツの留学環境などについて、皆さんにお伝えしようと思います。

ドイツといえば、皆さんご存知の通りベートーベン、ブラームス、ワーグナーなどなど有名な作曲家を生み出した、クラシック音楽とともに関係が深い国です。私は、そんな国で本場の音楽文化を学んでみたいと思い、ドイツへ来ました。

ドイツは、地元に音楽が密着していて、各都市にはオーケストラやオペラハウスがあり、人々は習慣のように演奏会を楽しめます。日曜日には教会でミサが行われ、神聖な楽器 "Posaune" を吹く私達はたまに教会に駆り出され、人々と聖歌を合唱と一緒に吹きます。ミサだけではなく、教会の合唱団は年に数回、演奏会を開きます。それはハイドンの天地創造だったりモーツアルトのレクイエムだったりいろいろです。(日本にいる時、なぜあまり演奏される機会のないモツレクがオーディションの課題になるのか不思議でしたが、ドイツではかなり頻繁に演奏され、それを日本は直輸入したからだったんですね。)

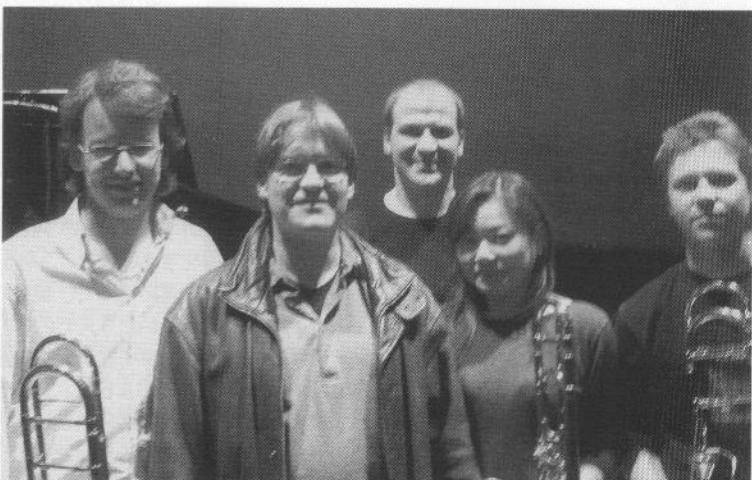
そんなドイツには、世界的地位を誇るベルリンフィルを最高峰に各オーケストラの名プレイヤーを集め毎年開催しているバイロイト祝祭管弦楽団、各地の放送響など、有名オーケストラがたくさんあり、すぐに聞きに行ける環境は素晴らしいと思います。

それでは少し学校について触れたいと思います。

ドイツの比較的大きい都市には必ず国立の音楽大学があります。(私立もあります。) 私達学生にとってありがたいことに、国立大学では学費は全額国が払ってくれます。最近不景気のため値上げしたい動きもあるようですが、私の学校ハノーファー国立音楽大学では、年2回(二期制)管理費を約2万円ぐらい払うだけです。あとは生活費と義務づけられている保険代です。日本の音楽大学卒業者の場合、毎週のレッスン、年2回のオーケストラ演奏会、年1回オペラとオーケストラの現代曲の授業が受けられます。

留学したい場合、一番大切なのは先生ではないでしょうか。もしもうすでに先生を決めて来ている人は、後は受験ということになりますが、私の場合日本から来た時に、まだ先生を決めていなかったので、何人かドイツでいいと言われている先生のレッスンを受けさせてもらいました。そ

して直感で決めた先生が、ヨナス ピュルント教授です。彼はスウェーデン人の上に、レッスンのスタイルはかなりインターナショナルで、ドイツからだけでなく世界からいいもの取り入れようとしています。それに加え、ジョアレッシー、トマス ホルヒ、ヨルゲンバン リュン(コンセルトヘボウ)、アンドレアス クラフト(シュトゥットガルト放送響)、ジェシカ グスタフソン(ストックホルム響女奏者!そして美人!)などなど世界から先生をマスタークラスの為に呼んでくれます。ヨナスの40歳の誕生日には、クリスチャン リンドバーグと一緒にトロンボーンアンサンブルの演奏会を開いたりもしました。生徒達はやはりレベルが高く、簡単にコンチェルトを吹きこなしています。この前ブラハのコンクールで3位になった子もいるし、有名オーケストラの首席を務めながら勉強している人もいます。ドイツ人達の練習は、自分が今、何を勉強しなければいけないかをちゃんと知っていて、その目標に向けて計画を作りそれを実践している、



シュトゥットガルト首席アンドレス クラフトのマスタークラス

という感じです。そしてみんなで助け合い、協力し合い勉強しています。私はこんな仲間と、そして世界の名プレイヤーに学べるこの環境が、とても気に入っています。

そして楽器についてですが、ドイツはみんなドイツ管を使用していると思っている人も少なくないと思います。確かに、日本よりはかなり多いですが、アメリカ管を使用している生徒がほとんどです。

例えばオーディションへ行けば80パーセントはアメリカ管、ドイツ管を使用しなければいけないオーケストラも、オーディションではアメリカ管でも可としています。いいのか悪いのか、かなりインターナショナルになりつつあります。

ます。それに加え、ドイツ人の留学というのもあります。私はドイツにわざわざ留学しに来ているので、おかしな感じがするのですが、私のクラスの生徒で学校を1年休学して、ロンドンやオランダに行く人が何人かいいます。そしてオーストラリアやヨーロッパ諸国から留学に来る人もいます。もちろん、旧東ドイツのようにドイツの大切な伝統を受け継いでいるいい学校もたくさんあります。

ここで、留学にドイツを考えいらっしゃる方へ、あくまでも参考としてですが、ドイツ人の間でいい先生と言われている大学の先生を紹介したいと思います。

Hanover: Jonas Bylund (バンベルク元首席)

Berlin: Steffan Schulz

(ベルリンフィル バストロンボーン奏者)

Würzburg: Andreas Kraft

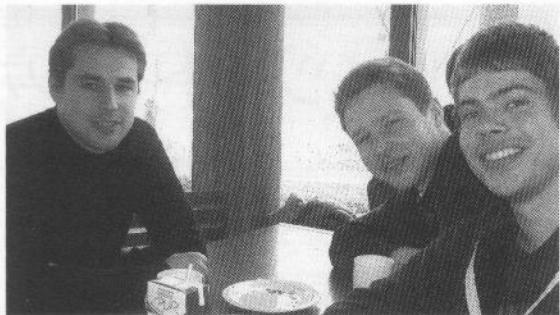
(シュトゥットガルト放送響首席)

München: Wolfram Arnt

(ベルリンフィル元首席)

Freiburg: Branimir Slokar

この他にもまだ素晴らしい先生はいると思います。みんな、ドイツのトロンボーン界について何か参考にしていただけでしょうか。ドイツは観光してもきれいなところです。ぜひ、遊びに来てみて下さい！



左アムステルダム コンセルトヘボウ首席 右 ブラハ3位
になったフレドリックベリ



左 ストックホルム首席 ジェシカ グスタフソン(美人!)
ヒトロンボーン伴奏者

プレッチナー工房訪問

2月14日まで9日間ほどベルリンへ行っておりました。成田に降り立って携帯メールをチェックしたところ、友人からのメールでJAT会報に昨年主催しましたオラフ・オットリサイタルの記事が載ったことを知りました。十数時間前までオットと一緒にだったので、すごいタイミングと驚きました。

今回のベルリン行きの理由は、2月8日にベルリン・フィルハーモニーで「兵士の物語」があり、オットとヴァレンツィイが出演するので、それを聴いてデュオリサイタルの仕込みをすることと、2月5日にオットのソロアルバムのオリジナル・テープが完成したので、オラフォットとベルリン在住の指揮者に会って、編集の確認をすることになりました。

ヴァレンツィイのお母様が5日に急逝し、9日と10日に予定していた3人での打合せは流れてしまいましたが、8日の演奏会の後、デュオリサイタルの宣伝用に2人の写真を撮ったり、タイムテーブルを確認することは出来ました。

ベルリンでは、トーマス・ヤーン氏の工房に連れて行ってもらいました。ごく普通のアパートが工房になっていて、トロンボーンのトーマス・ヤーン氏とトランペットのトーマス氏（苗字忘れました）、つまり2人のトーマス氏が2人だけでもくもくと楽器を創っていました。ヤーン氏のドイツ語は物凄いバルリン訛りで、私には3分の1くらいしか言っていることが分かりませんでした・・・。

オットは最近、また楽器を替えました。Weite 3のスネイクのないノーラッカーにしていました。「兵士の物語」の時には、ベルの付け根が凹んだまま吹いていて、9日にヤーン氏の工房で直してもらっていました。本当に信じられないほど柔らかい材質で、ヤーン氏がなにやらクリームを塗って、金属を使って手でこねこねとしたら直ってしまいました。魔法を見るようでした。

楽器の話ということでは、2月6日の夜はライプツィヒへ行ってゲヴァントハウス管弦楽団のシンフォニエッタを聴いてきました。トロンボーンとバストランペット確認したところ、フォイクトでした。ヤーン氏の工房には様々なドイツ管の楽器が展示されており、巻き等を確認したところ、オットも「それはフォイクトに違いない」と言っていました。

ベルリン・プラス・デュオ コンサート実行委員会代表、
十文字学園女子大学助教授
大友 由紀子

B→C バツハからコンテンポラリーへ 神田めぐみトロンボーンリサイタル

おお！なんとキヤッサーがリサイタル。それも日本初！これはなんとしても駆けつけて応援してやらねば。というわけで4月6日【火】リサイタルホールへ向かいました。到着して受付にて当日チケット購入を申し出ると、いやはや、あまかったですね、なんと完売！トホホと嘆いてみると、お姉さんが、キャンセル待ちを登録すれば順番に案内出来るかもしれない、とのこと。見れば名簿には、すでに8人の名前が記されていました。ダメもとで記帳してみるとトホホでした。うーっとトロンボーンのリサイタルで完売御礼とは、アイドル歌手でもあるまいし、などと考えてみると、そーか彼女はアイドルトロンボーン奏者だったのか！などと妙に納得してしまうのでした。ちなみにキヤッサーというニックネームは桐朋時代の彼女を知る者にはおなじみで、ハーフとはいえどう見ても日本人離れした容姿から、ぱっと見キャサリンって感じだよね、それでニックネームはキヤッサーだね。などと勝手に付けられた物でした。本人も気に入っていたようで、自分でも自らをキヤッサー呼びていました（笑）。さて、話が横にそれましたが、どうやら主催者がチケットを多めに出していたようで、空席を確認しては順番に案内してくれるではありませんか。というわけで無事入場することが出来ました。めでたし。笑顔でステージに登場する彼女を久々に見ると、ハーフの美女であることは変わりは無いのですが、すっかり貴婦が備わっていました。うむ、アメリカンってかんじですね。素敵です。

一曲目A. ギルマン／交響的断章が終わると溜息とともに盛大な拍手が巻き起こりました。彼女のサウンドは明るく、柔らかく、耳に不快な角は一切無く、音楽はドラマチックで聴衆を魅了しました。彼女の魅力はそのテクニックもさることながら、このサウンドこそが最大の武器でしょう。それは特に中低音に顕著で、ミドルのFから下のオクターブのあしらい、表現が見事なので結果として音域が広く、ハイトーンがより劇的に伝わるのだと思います。そう、たとえば、出来の良いBassTBの作品の音域の広さがテナー吹きにはちょっと羨ましかつたりするのありますよね。音楽の表現を広げる一つに、より高い音をより強くというアプローチは金管奏者として当然あるわけですが、彼女のうちにそういった力みのような物は微塵も感じさせることは無く、すべてのエネルギーが音楽の表現に使われているのが素晴らしいと思います。少々残念だったのはHORNとのコラボレーションです。それは、歌曲のアレンジであること、男女で歌われるほどの演奏効果の差が、音域の近いこの楽器との組み合わせでは無理があるのでは、と感じさせられてしまいました。演奏は素晴らしいものでした。ここで少し、ハードウエアにも触れなければなりません。本人に確認したわけではないので見た目の判断です。

ご了承ください。CONN88H、オープンラップ、MPはジャルティネリにプラスチックリム、スライド先端に支柱が付いているのが目に付きました。これは特注なのかと思いましたが、アメリカのオークションに出品されている物を発見しました。後付けのもので確かにスライドの幅に合わせて3タイプ用意していました。おお、これか、と思いましたが詳細は定かではありません。しかし、これが彼女のサウンドの秘密だとするとヒット商品になるかも知れませんね（笑）。最後に、会って一声かけようかと思いましたが、CDへのサイン会の長蛇の列を見てひるみました。うーん、まさにアイドル！

ハイパートロンボーンアンサンブル
ボルカバンド：エーテルワイズ
Tadao Yamazaki 山崎忠男
<http://www.Edelweisskapelle.jp>



[曲目]

- A. ギルマン／交響的断章・J.S. バッハ／《無伴奏フルート・パルティータ》イ短調 BWV1013 から「サラバンド」・J.S. バッハ／《マタイ受難曲》BWV244 から「耐え忍ぼう、たとえ偽りの言葉が私を突き刺そうとも」・J. タイザック／哀歌（2003／日本初演）
- B. スターク／ゴスペル・ソング・ファンタジー（2002／2004改訂版世界初演）
- E. イウェイゼン／トロンボーンとピアノの為のソナタ・ブラームス／「水はざわめき」Op.28-3「愛の道」Op.20-2「こうして我らはさすらおう！」Op.75-3「ワルブルギスの夜」Op.75-4・L.-E. ラーション／コンセルティーノ Op.45-7【アンコール】・ハーライン（ブルース・スターク編）／星に願いを

ウィーントロンボーンカルテットアンサンブルによるクリニック

二時間にわたるコンサートを終え、サイン会の後行われたアンサンブルクリニックには二つの団体が参加した。始めは東京ミュージックメディアアーツ尚美のトロンボーンカルテットMAX。曲目はモーティマーのパリジェンヌ。素晴らしい演奏を聴かせてくれた。ウィーン4のメンバーは一瞬言葉を失ったように見えたが、そのうち音楽表現とバランスなどについてかなり細かく指摘を始めた。しだいに尚美のカルテットは一段と完成に近付いたアンサンブルになつていった。

2番目に受講したのは東京音大と国立の混成アンサンブルでバッハのd-moll フーガを演奏した。ウィーントロンボーンカルテットのメンバーからはフレーズの取り方、テーマや旋律の演奏と伴奏部分とが各パートでどのように判断するかが大事だという指摘があった。また同じフレーズを同じように演奏する事、フレーズのどこに重要性（音楽上のアクセント）をもたらせるか細かくアドバイスがあった。はじめちぐはぐだったアンサンブルは同じ響きを持つようになり、彼らのd-moll フーガは音楽的な成長を遂げた。

受講者の感想

トロンボーンカルテットMAX

本日はこのようなレッスンを開いていただき誠にありがとうございました。私たちは公開レッスンを受けるのがはじめて緊張しましたが自分達では気付かなかつた所などをたくさんご指導していただき、楽しくレッスンしていただいたのでメンバー一同大変勉強になりました。今日教えていただいた事を忘れずまたこれから練習や本番も頑張ります。本当にありがとうございました。

代表 高橋亜由美

メンバー

上田芳明(2nd)、宇佐見美香(3rd)、白旗弘(1st)、高橋亜由美(4th) 全員4年生

宮林:レッスンの中で次々とアイディアが出てくるのに驚き、アドバイスの一つ一つが勉強になりました。有難うございました。

原田:またないチャンスをいただきました。ウィーントロンボーン四重奏団の音を素晴らしいホールで聴く事が出来て、その直後に直接彼等の音楽を学ぶ機会を同時に得て、今後の自分にとって最良の1日となりました。



トロンボーン MAX



東京音大・国立音大アンサンブルを指導する
ディートマル・キューブルベック氏

新理事紹介

去る3月22日総会にて2人の新しい理事が誕生した。

大塚善弘

日本大学芸術学部音楽家卒。ヒロミュージック代表

村田秀文

東京コンセルヴァトアール尚美卒、
ロイヤルチェンバー・メトロポリタン管弦楽団
首席トロンボーン奏者／ボザウネシュトラーセ

東京音大・国立音大トロンボーンアンサンブル

先日は有難うございました。これからも4人で頑張って行きます。

メンバーのメッセージ

平形:もっと頑張ります、一から出直します。

金子:ウィーントロンボーン四重奏団の素晴らしいサウンドを肌で感じる事ができ、またこの素晴らしいホールで吹けた事はとても幸せだと思います。学んだ事を自分の技術に生かせるように頑張ります。

ロイド・エリオット氏逝去

去る5月12日 アメリカ西海岸のトロンボーン奏者 ロイド・エリオット氏が肺炎のため77歳で亡くなられた。氏は1997年と2001年に私が主催した100人のトロンボーンコンサートにゲストとして出演して下さり日本のトロンボーン愛好者の方々にも身近に感じていただいているのだと思ふ。簡単に氏の輝かしい功績を御紹介する。19歳の頃からアル・ドヒュー、ジミー・ドーシー、チャーリー・バーネットなどの楽団で演奏し、1947年よりスタジオミュージシャンとして、ラジオ、テレビ、レコードなどでの演奏の他 1000を越える映画のサウンドトラックのために演奏した。その中には皆さんも御存知かもしれないが、ジョーズ、スタートレック、ET、ウエストサイドストーリー、未知との遭遇、マイフェアレディ、80日間世界一周があり、テレビでは、ボナンザ、大草原の小さな家、そしてアカデミー賞やグラミー賞（アメリカでは放映されている）の音楽に長年たずさわってきた。

一緒に音楽に取り組んできた作曲家には、デビッド・ローズ、ネルソン・リドル、ビル・メイ、ヘンリー・マンシーニ、バーシー・フェイス、ジョン・ウィリアムス、ヴィクター・ヤング、そしてイゴール・ストラビン斯基がいる。これらの偉大な仕事を残したロイド・エリオット氏のため、5月29日に行われた、ウエストウッド記念葬儀場での葬儀の翌日、30日にロス・アンジェルスレコーディングミュージシャン協会主



催でハリウッドの教会で彼を偲ぶ会がとりおこなわれた。

ヘンリー・マンシーニ樂団の二代目ソリスト（ロイド・エリオット氏が初代）ディック・ナッシュ氏はロイド・エリオット氏は「トロンボーンを崇高な高みへと導いた」と評している。私が昨年4月 ロス・アンジェルスに彼を訪問し、お世話になった時に実にお元気で その後ロサンゼルスのトロンボーン仲間とベダーソンの曲のみのCDの録音にも参加されていた。ところが昨年1月末肺炎のため入院、今年になって集中治療室に入られたため、彼の二人の娘さんから励ましのメッセージを日本から彼に送って欲しいという要望が幾度か寄せられていた。私もいろいろなトロンボーン奏者にカードやEメールを送るようお願いしエリオット氏は寄せられるそれらのメッセージをとても励みに思われてたと聞いている。優しく人々に思いやりがあり、いつも紳士的で上品なロイド・エリオット氏は多くの音楽家や音楽ファン、そして彼の御家族から大いに愛されてきた。この人間として音楽家としてかけがえのないロイド・エリオット氏の死はとても残念ではあるが、素晴らしい音楽を我々に聴かせ、残してくれたことに深く感謝したい。彼の演奏と功績は音楽会の歴史にまばゆく永遠に輝き続けることだろう、大きなダイヤモンドのように。

文 村上準一郎

編集担当からのお願い

トロンボーンに関する催し・コンサートなど
日本国内外かかわらずこのインフォメーション
コーナーに掲載いたしますので、どうぞ御遠慮
なく情報を寄せ下さい。

連絡・お問い合わせ
日本トロンボーン協会事務局
(郵送に限る)
E-Mail : info@jat-home.jp
HomePage : <http://www.jat-home.jp/>

会報編集部より

この会報は日本トロンボーン協会の主旨に添い、
内外のトロンボーン奏者、トロンボーン愛好家、音
楽ファンを応援すべく発行されています。

会員の皆様の中で会報制作に参加してみたいと思
われる方は村上まで御一報下さい。また、情報・質
問等もお寄せ下さい。お待ちしております。

会報編集担当
村上 準一郎 TEL&FAX 03-3484-8577
E-Mail : info@jat-home.jp
HomePage : <http://www.jat-home.jp/>

リサイタルへの道 - 第8回リサイタルを終えて -

西田 幹

当機関誌の編集部の方からリサイタル報告を書いてみないかとお説いを下さって二つ返事でお引き受けしたもののいざ文章にするとなるとなかなか筆が進まないものであります。何から書き出してよいものやら締め切りぎりぎりまで悩んでいる有り様、普段から文章など書き慣れないばかりか、文才などもともとあるわけもなく、気の利いた言葉など今更思い浮かぶわけがない。えへい！こうなったら自分のホームページのコラム式で書き進めてしまえ～！という訳で愉快で楽しい「リサイタルへの道」と題して書き進めていくこうと思う次第であります。くだけた文面かも知れませんがどうぞ最後までお付き合い下さいますようお願いする次第であります。まずは何をさておいてもリサイタル報告と参りましょう。

今年5月6日「すみだトリフォニー・小ホール」にて第8回 西田 幹ベース・トロンボーン・ソロ・リサイタル「Bass-Trombone meets All my friends (ベーストロンボーン・ミーツ・オール・マイ・フレンズ)」を開催。開場午後6時半。開演午後7時、終演は9時15分頃。出演者、テナー・トロンボーン：内田日富、内田光昭、松林辰郎、橋本佳明、村田秀文、邑原 希、澤田英哉、笠川由之、工藤幸枝、石川雄亮ベース・トロンボーン：玉那霸

力、朝里勝久ご覧の通り今はどこにもピアニストの名前はございません。ですがどうです！この豪華キャスト！！出演者全員トロンボーン、そして全曲をトロンボーンだけでやってしまおうという演奏会であります。こうなればこれをお読み下さっている皆様も興味津々といったところでしょうか、プログラムもご紹介しておきます。

▼1部 デビット・フェッター /

パレストリーナの主題による変奏曲

ヘンリ・トマジ /「生きるべきか死すべきか」

エリック・エワイゼン /バストロンボーンとトロンボーン・クワイアの為のカブリッヂ /バストロンボーンとトロンボーン・クワイアの為のコンチェルティーノ

▼2部 マイケル・ティヴィス /スライド アンド ザ ファミリーボーン /トロンボーン インスティテュート オブ テクノロジー /ライフ・ライブドウ

セロニアス・モンク (編曲スライド・ハンプトン) /ラウンド・ミッドナイト

トニー・ペダーソン /ブルー・トバース

アストル・ピアソラ (編曲 西田 幹) /バストロンボーンと12本のトロンボーンの為の「ピアソラ組曲」/～リベルタンゴ～忘却～孤独の歳月～

以上のプログラムにアンコールが2曲でした。こうしてプログラムを振り返ってみると何ともまあ濃いプログラムでありますなあ、よくぞ最後まで吹き通せたものだと思います。「やりたいこと全部やった」って感じがします。

思えば9年の初リサイタルも同じ会場であります。以来、地元滋賀県で2回、北海道で2回、東京は今回で4回目、サロン



コンサートやライブなども含めれば数え切れないくらいのソロコンサートをやりました。中でも初リサイタルは今でも忘れることが出来ない悲惨苦闘の連続だった大切な思い出なのであります。リサイタルというもの、やはり2時間近くのステージを最初から最後まで吹き通さなくては話になりません、「音楽的」などと悠長なことは言っていられないであります。「とにかく耐久力をつけるべい！」とばかりに霞雲に長い時間を練習しておりました（まるでスポーツドラマのようでございます）。今思うと本番に向けてコンディションを整えていくということなどあまり考えていなかったようです。さすがに練習の甲斐あって6～7の練習時間などもろともしない耐久力をつけたのであります！（ど～よ！～って感じでしょうか～）ところがどうでありますよう本番当日朝を迎える樂器を吹いてみますすれば練習のし過ぎが祟つて唇はヘロヘロ、筋肉の疲労も全然取れていないあります。

そして本番、もうご想像に難くないこととは思いますが、疲れ果てた唇での2時間のステージはそれはそれは地獄の苦しみであります。「後悔先に立たず」「後の祭り」そんな言葉が頭をかすめます。昔の人は良いことを言ったものであります。改めて「温故知新」の大切さに感じ入った次第であります。

「いやいやそんなことに感じ入っている場合かいな。今は本番真っ最中、目の前の譜面を何とか吹き切らんとあかんやろ！～あ～つ、もうあかん！唇保たへん。音が鳴らへんやんかあ～、もうあかん限界やで～！誰か助けてえ～。誰や、リサイタルなんかやるって言い出したのは！？あっ、そうか自分やった～～」正直な心境でした。（金管樂器の経験をお持ちの方ならこの気持ち、良くお分かり頂けるのではありますまい

か～～）「リサイタル」でのステージがこれほど孤独で過酷なものとは初めて思い知られた初リサイタル経験であります。聴きに来てくれた友人も「クラシックの演奏会で眠くならないばかりか、手に汗握るコンサートは初めてやったで～！楽しませててくれてありがとうございます、こんな楽しい演奏会やつたらまた聞かせてや、期待しててや、たのんまっせ！」などと本人の気も知らず失礼なことを言いだす始末。まあ言い返せないニシダもニシダですが～～

しかしながらニシダも馬鹿ではありません。それはそれでちゃんと学習しているのであります。今までの7回の本番の経験を生かし、さらには「温故知新」の気持ちを忘れないニシダはベストコンディションを目指して約半年前からの練習に突入したのであります。今まで「歌」をテーマにシーマンやピアソラといった作曲家の作品を取り上げてまいりましたが、今度はちょっと違います。プログラムを見てお分かりの通りバストロンボーン真っ向勝負！と言わんばかりのバストロンボーンの為に作曲、あるいは編曲された作品ばかりを選曲し、気合いも充分。しかしながら困ったことが再び起こったのであります。一つは楽譜の問題（いや自分自身の問題かも知れません）、そしてもう一つはマウスピースの問題であります。ニシダこう見えましても今年44歳を迎えようという「オヤジ様（気品あふれる紳士・・・の意）」で

ございます。普段から譜面を吹くことは慣れているといえども覚えるという作業には慣れておりません。これがまた崇りました次第です・・・と申しますのはいくら練習しても譜面が頭に入っこないのであります(やっぱり自分の問題でした)。練習しているときは別に何も問題はありません。いつも通り順調に練習が進みますが問題なのは翌朝すっかり忘れていることあります。毎日が初見状態、こんな日が何日も続きます・・・我ながら情けない話であります。「人間は忘れる動物である、忘れる以上に覚えることである」どこかの偉い方がこんなことを言い残しておりますが、まさしくその通りでございますなあ。やはり昔の人は良いことを言います。普段から頭は使っておくものであります。

もう一つのマウスピースの問題は、今まで大きなサイズのマウスピースを使っていましたがこれがどうもよろしくありません。エワイゼンの作品のように速いテンポでの低音のフレーズに唇の振動が付いていかないので。そもそも大きなマウスピースにした理由というのは低音がしっかり出せるようにということだったのですが、返って大きすぎて「ハハハ」状態でしっかり鳴りません。一つの音を出すには良くてもフレーズにならない、サウンドがついてこない・・・こういうのを本末転倒とでも申し上げればよろしいのでしょうかか・・・しかしながら悩みはしましたがそんなことでめげている場合ではありませんで、マウスピースも小さめに替え心機一転。

マウスピースにも少しずつ慣れ、老朽化したこの頭にも楽譜が入ってきたちょうどその時期から出演メンバーと合同リハーサルが開始されます。これがまた上手くいきません。メンバーのスケジュール調整がまずは大仕事、なんせ出演を依頼した皆さんは超売れっ子のトロンボーン奏者ばかり、そう簡単に全員が集まれる訳がありません。確かに全員が集まれたのは本番当日だけではなかったでしょうか。そんな状況でもリハーサルは進みます。そして新たな問題がまた一つ、独りの練習とアンサンブルでのリハーサルはまるで違います。ピアニストだけなら融通が利く(融通を利かしてもらってる・・・これが正解です)のですが、なんせ全員での演奏は12人が一斉に音を出します。普段なら普通に吹けているところが思うように吹けないのであります。特にエワイゼンの作品には苦しました。「こりやあかんてよ。ホンマにニシダ大丈夫かいなあ〜? ? (西田は本当にちゃんと吹けるのだろうか・・・の意)」エワイゼンに共演してくださった皆さんには不安な思いをさせてしまいました。こんな具合でリハーサルもつつがなく進み(と思っているのは自分だけかもしれません)・・・)本番を迎える訳ですが、本番を日一日と待つ心境というのもこれは言葉には言い表せないものがあります。一週間くらい前でもまだまだ先の出来事のような、それでいて前日になると「明日が本番? ? 明日のこの時間は本番やってる訳? ?」などと他人事のように思ってみたりします。

やはり気持ちのどこかで緊張しているのでしょうか。チラシやプログラムの作成の他にもチケットの売れ行きや当日のお客さんの入り等々、演奏以外にもそんなことを心配しなくてはなりません。チケット「びあ」などでも売り出していますが購入して下さる方はほんの僅かです。そのほとんどは手売りに頼らなくてはなりませんから東奔西走する毎日が続きます。チケットを買っていただく為に知人と待ち合わせして、せっかくだからと最寄りの居酒屋で一杯始まります。1枚のチケット代よりも高い飲み代を払い、何のために売っているのかよく分からなくなってしまいますがこんなことがほとんど毎日のように続きます。主催者としては結構気を使っています。(体力と、そして肝臓もフル稼働です) 堅苦しい演奏会が苦手なニシダは本番中、休憩以外は一度も舞台袖には

引き上げません。1曲終わればマイク片手にトークで場をつなぎまた演奏します。出演者も全員紹介します。(しゃべりすぎ...)などお叱りを頂くこともあります(・・)今では初リサイタルのような無茶な練習はしませんし本番中に音が出なくなる(・・)などということもありません。音楽的なことも少しは考えられるくらい余裕が出来てきたかも知れません。

演奏もトークも自分にとってはそれ全てが「西田幹リサイタル」の一部なのだと思っています。聴きに来て下さった皆さんとステージが一つになっていくそんな雰囲気が大好きだからですし、演奏家「西田幹」ではなく、人間「西田幹」に触れて頂きたいと思っていますからかも知れません。アンコールの本当に最後の1曲を終えた時のあの暖かい拍手は今夜の演奏会が成功したことを実感させてくれます。ミュージシャン冥利に尽きるかけがえのない瞬間です。

こうしてリサイタル開催を決意し実現できるのは応援やご支援下さる方々、そして会場に足を運んで下さる方がいらして下さるからこそですし、特に今回は内田日富さん、松林達郎さんと言ったプロの世界で第一線で活躍しているプレイヤー、日頃からステージを共にしている音楽仲間、そして後輩達の頼もしいサポートを得ることができたからこそだと思います。感謝しないではいられません。毎回の事ではありますが、苦しみ、悩み、悪戦苦闘しながらモリサイタルを終えた今、率直に「やつて良かった」そう思います。そして一人でも多くの方々にバストロンボーンという楽器を知って頂きその音に触れて頂けるよう、そしてなにより多くの方々との新しい出会いと音楽との出会いを求めてこれからも続けていこうと思っています。今年11月14日、香川県三豊郡のマリンウェーブにて9回目のリサイタルも決定しております。どうぞ、お近くにお住まいの方がいらっしゃいましたらお越し頂ければと思います。最後になりましたがこのような機関誌での報告という機会を与えてくださった協会の皆様、そして編集部の方々に厚くお礼申し上げる次第です。ありがとうございました。

西田 幹 (Bass-Trombone)

滋賀県彦根市出身。「カルロス管野 & 热帯JAZZ樂團」を始め「早川 隆章 & T-SLIDING」、「内田 日富 & TROMBOYAGE」「松尾明 & TAKE TEN」「吉田憲司 & HAVATAMPA」等で活動。ソロ活動にも積極的に取り組み'99年初のソロリサイタル「CLASSIC with JAZZ MAN~詩人の恋~」開催を皮切りに、全国各地でリサイタル開催。2000年邦人バストロンボーン奏者として初のソロアルバム「バストロンボーン・ミーツ・シューマン」をリリース'01年セカンドアルバム「バストロンボーン・ミーツ・ピアソラ」リリース。

'04.11月には香川県にてリサイタル開催予定。ミュージックスクール「DA・CAPO」講師松本熙、ジョン・ロジャック各氏に師事。ホームページ <http://homepage2.nifty.com/basstrombone/>

2002年5月27日

セカンドアルバム発売!

アルバムタイトル

「Bass-Trombone Meets Piazzolla」

(VIRA - 0107)

お問い合わせは 西田 幹

E-mail : kankan@jp.bigplanet.com

第4回 50本のトロンボーン大集合！！

～禿山の一夜に挑戦～



(ムソルグスキー)

今年は第4回を迎える演奏会場も一新、是非皆さんで前ってご参加下さい。
トロンボーン愛好家の方、音大生、高校生、の皆さんどうぞ！

日 時	2004年 9/18(土)～20(月・祝)
講習会場	ベンション平川 高山駅から約30分 送迎バスあり
曲 目	禿山の一夜 サウンドオブミュージックなど
募集定員	40名(テナー30名 バス10名)
講 師	★近藤孝司(大阪センチュリー交響楽団) ★新立憲一(東京フィルハーモニー交響楽団) ★今村行熙(セントラル愛知交響楽団) ★日生貴之(瀬戸交響楽団) ★市村信持(群馬交響楽団) ★村上準一郎(元 シャーブス&フラツツ) ★細洞 寛(東京フィルハーモニー交響楽団友) ★山根禄里 ★立嶋紀理子 ★小野隆洋 ★伊藤敬二 ★渡辺善行

上記諸事情は演奏会などの都合により変更になる場合もございます。

ご参加費

一般 ¥12,000

ご宿泊費

一般 ¥19,000(2泊6食・税込)

学生割引

¥24,000(参加費・宿泊費・税)(中学生以上大学院生・学生証必要)

(前日泊ご希望の方は、別途¥7,500にてお泊りいただけます。)

日程表

日付	時間	内容	備考
9月18日 (土)	10:00～12:00	個人レッスン	集合可能な方・ドイツ管講習も可能です。
	13:00～	集合	
	14:00～	合奏	
	18:30～	パーティー	飛騨牛のバーベキュー
9月19日(日)	09:30～12:00	パート練習	
	13:30～16:00	合奏	
	16:00～18:00	レッスン	個人またはグループレッスン
	18:30～	夕食	
	20:00～22:00	合奏	
9月20日(祝)	14:00～	演奏会(予定)	禿山の一夜などを飛騨市テーマパークにて野外演奏
	終了後	解散	

主 催 オープンハート トロンボーンアンサンブル

<http://www.openheartpension.com/tb50.html>

共 催 飛騨市、飛騨市教育委員会、〔株〕奥飛騨山之村牧場

上宝村、上宝村教育委員会

協 力 トロンボーン アンサンブル クリップ

<http://www.geocities.co.jp/MusicHall/5523/>

ご宿泊先 岐阜県吉城郡上宝村荒原 オープンハートベンション平川

Tel 0578-6-3107 <http://www.openheartpension.com/>

お申し込みお問い合わせ

参加申込書にご記入の上、郵送・FAX・E-mailにてお送りください。

ご郵送先 〒191-0065 東京都日野市旭が丘2-3-17 千歳ビル

株)エヌケートラベル 担当 岩本

Tel042-584-2210 Fax042-581-9178 E-mail yta55@nk-travel.co.jp

お申込書はこちらからダウンロードできます。<http://www.nk-travel.co.jp>

詳しいお問い合わせ

平尾達也(ひらお たつや) dolce.hirao@nifty.com Tel 0263-86-8292

募集締め切り 平成16年8月20日(定員になり次第締め切り)